

# 親父が認知症に!?

## 平藤清刀さんの介護体験記 #8

■「家に帰る」と言っ  
て家を出た

自宅で昼食を摂った後、今度は「家に帰る」と言っ  
て再び出かけて行きました。このときの母は「また自分で帰ってくるだろ」と、さほど心配して  
いなかったとい  
ます。

午後3時半頃、1台の救急車が1階のエレベーターホール前に停まりました。救急隊員が降りてきて、自宅にいた母を訪ねてこ  
う告げたそうです。「救急車にご主人が乗っ  
ています。病院まで同行してくだ  
さい」

この話を聞いたとき、ずいぶんノンビリした対

応だと思いましたが、つまり救急隊は父の所持品から自宅を知ったということ  
です。そして病院に直行せず母に同行を求め  
て来たということは、父の  
状態は直ちに生命の危険  
が及ぶものではないわけ  
です。

私はこのとき、取引先の出版社が行うイベントの準備を手伝うため留守に  
してました。ですから帰宅  
してから、近所の人からの留守電を聞いてこの事  
実を知りました。

留守電には、子供の頃から知  
っている近所のおばさんの声で「お父さんが救急車  
で運ばれたよ」と慌てた様子  
のメッセージ

しか入っておらず、どこ  
の病院に運ばれたのか  
ま  
で分かりません。ですから救急隊を置  
いている区内の消防署に電話を  
かけて事情を説明し、搬送先  
の病院はどこなのかを問  
い合わせました。

患者のプライバシーを守る義務があるはず  
ですから、っきり身分証明だの何だのとややこしい話  
になることを覚悟して  
いましたが、意外にすん  
なり教えてくれました。  
やはり緊急性のほうが大事  
という判断だったので  
しょうか。

病院が分かっても私は、すぐ  
に駆け付けけることはし  
ませんでした。それには理  
由がありました。

(次回に続く)